

今宿遺跡

—第4次発掘調査報告書—

2020

姫路市教育委員会

序

姫路市内には約1,200箇所の遺跡が存在します。遺跡は私たちの祖先が残した国民の共有財産であるとともに、地域の歴史を正しく理解する上でかけがえのない貴重な文化財であります。姫路市教育委員会では、これらの遺跡を保護し未来に継承するため、発掘調査を進めるとともに、現地説明会や企画展等を通じて、その成果を市民の皆様に広く周知するよう努めています。

今宿遺跡は昭和40年代には山麓に古瓦が散布する場所として知られていました。平成14・15年度に兵庫県教育委員会が行った第1次調査によって多量の古代瓦が山裾に集積する状況が明らかになりました。今回の調査では、多量の瓦は近代以降に別の場所から運ばれてきた可能性があることが新たに判明しました。

これらの事実は今宿遺跡の実態を解明する上で、かけがえのない知見であり、ここに調査成果を報告し、今後の調査・研究の進展に資する所存です。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました事業者様はじめ関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

令和2年(2020年)3月

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例言・凡例

1. 本書は、姫路市西今宿五丁目944番6他において実施した今宿遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、コーポレート開発株式会社から委託を受け姫路市教育委員会が実施した。調査は姫路市埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。本書の執筆・編集は南が行った。
3. 発掘調査に関する写真・図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4. 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系V系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
5. 土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
6. 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課発行『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』(2010)に依拠した。

目 次

第1章 調査に至る経緯・事業の経過	1
第2章 遺跡の周辺環境	1
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	2
第2節 遺構・遺物	2
第4章 総括	3

挿図目次

図1 今宿遺跡と周辺の主な遺跡	図4 辻井廃寺出土の複弁八葉蓮華文軒丸瓦1類
図2 既往調査・試掘・確認調査・本発掘調査の位置図	図5 今宿遺跡 瓦地区別出土量
図3 SK01 から出土した土師器	

挿表目次

表1 瓦の地区別集計	表3 平瓦の縄目を除くタタキの地区別集計
表2 平瓦の縄目を除くタタキの分類一覧	

図版目次

図版1 着手前詳細地形図、調査区平・断面図、SK01 平・断面図、SK01 出土土器	
図版2 出土瓦(1)	
図版3 出土瓦(2)	
図版4 出土瓦(3)	
図版5 出土瓦(4)	
図版6 遺構写真(1)	
図版7 遺構写真(2)	
図版8 出土遺物写真	

第1章 調査に至る経緯・事業の経過

姫路市西今宿五丁目944番6他において開発工事が計画された（図1）。計画地が今宿遺跡（県遺跡番号020161）に該当することから、文化財保護法第93条の規定に基づき事業者から平成30年4月26日付で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。姫路市教育委員会では平成31年1月29・30日に遺跡の残存状況を把握するため試掘・確認調査（調査番号：20180422）を実施した。計画地の西側では平成14・15年度に兵庫県教育委員会が県道田寺・今在家線の道路整備に伴う発掘調査（以下、第1次調査と呼称する）を実施しており、二次的に集積した多量の古代瓦（重量9,657.7kg）が出土している（図2）。

試掘・確認調査により、古代瓦は計画地の南部に集積すると推測された。これをもとに事業者と協議した結果、施工により遺跡の破壊を免れることができない161m²を対象に本発掘調査を実施することになった。平成31年4月15日付で事業者と委託契約を締結し、発掘調査を開始した。現地調査（調査番号：20190024）に要した期間は、平成31年4月18日から令和元年5月8日であった。現地調査終了後、整理作業及び報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査の開始から報告書の刊行までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会

文化財課

埋蔵文化財センター

教育長 松田克彦
教育次長 坂田基秀
生涯学習部
部長 沖塙宏明

課長 花幡和宏
課長補佐 大谷輝彦
技術主任 関 桢

館長 前田光則
課長補佐 岡崎政俊（庶務）
係長 森 恒裕（調整）
技術主任 南 恵和（調査・整理）

第2章 遺跡の周辺環境

今宿遺跡は姫路市の中心部から西方約3kmに位置する。周辺には北側に振袖山（標高125m）、西側に舟越山（標高61m）などの独立丘陵が存在し、今宿遺跡もその一角（標高26.9m）に位置する（図1）。

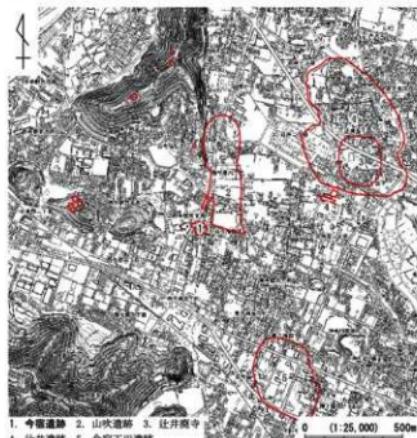


図1 今宿遺跡と周辺の主な遺跡



図2 既往調査・試掘・確認調査・本発掘調査の位置図

北東に約900m離れて辻井廃寺が存在し、7世紀末葉から8世紀前葉頃のいわゆる川原寺式の末流とされる複弁八葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦及び8世紀後半以降とされる播磨國府系瓦が出土している^(注2)。

今宿遺跡は昭和40年代には「山麓の道路脇に古瓦包含ならびに散乱」^(注3)する場所として知られていたが、その性格は明らかにされていなかった。第1次調査の結果、瓦は二次的に集積したものであるが、周辺部に未発見の古代寺院が存在する可能性が指摘された^(注4)。また、丘陵の北側における県道田寺・今在家線の道路整備に伴う発掘調査(2次・3次調査)により、弥生時代後期・飛鳥から奈良時代・中世の各時期の集落遺構が見つかっている^(注5)。

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査地は小独立丘陵(標高26.9m)の南東斜面に位置し、調査前は竹林に覆われていた。竹林を伐採し現況測量を行った後、調査区全体に4m×4mのグリッドを設定し地区割りを行った。その北西端を起点に東西方向をA~F、南北方向を1~5として割り付け、アルファベットと数字が交差する地区名を例えばA-1区のように呼称した(図5)。調査区の層序は表土(約20cm)、灰黄褐色のバイラン土(30~50cm)を経て岩盤に至った(図版1)。遺物は表土を除き地区別に取り上げた(表1・図5)。遺構は岩盤面で土坑を1基(SK01)検出した(図版1・7)。

第2節 遺構・遺物

SK01 (図版1・7) 調査区の南東部で検出した。長径72cm、短径55cmの歪んだ椭円形を呈し、検出面からの深さは27cmを測る。埋土は灰黄褐色土の單一層であり、一気に埋められた可能性がある。その中層から上位で複数の完形品を含む土師器杯が一部重なった状態で出土した。

土師器杯のうち復元できたのは11個体である(図3)。いずれも回転台成形で、その一部(図版1-1。以下、遺物番号は通し番号のみ記載する。)は口縁部に煤が付着していた。1は口径13.1cm、器高3.7cmを測る。外面に2段のヨコナデを施し底部は不定ナデで仕上げる。平安時代中期の所産とみられる。

瓦集積 (図版1・6) 表土及び灰黄褐色土から総重量2,330.6kgの瓦が出土した。灰黄褐色土は山裾の下方に至るほど厚く堆積しており、調査区南部ではその中層より上位に円碟を含んでいた。断面観察の結果、旧表土とみられる土壤化した土層は確認されなかった(図版1・7)。多量の瓦は灰黄褐色土の中層より上位から出土したもので、岩盤直上から出土したものは少なかった。このような状況から、瓦は二次的に集積されたものであることが確認された。地区別の出土傾向をみると、南西部(A-3・4区)及び東部(E-4区・F-4区)の山裾から高密度で出土した(図5)。後者については、現状でも荒神社の周辺に瓦が散布しており、瓦集積が調査区外に広がる可能性がある。

瓦の大半は古代瓦であったが、これらに混じって中近世土器・陶磁器及び近世瓦・煉瓦が少量出土した。古代瓦は軒丸瓦(2~8・51)・軒平瓦(9~20)・丸瓦(21・22)・平瓦(23~42)・埠(43・44)・面戸瓦(45)・鶴尾(46~48・52)があり、近世瓦には軒丸瓦(49)・軒平瓦(50)がある。

軒丸瓦 (図版2・8) 全て複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。このうち花弁の起伏が大きいM2類(2~6・51)と、それが小さいM5類(7・8)に分類できる^(注6)。M2類はわず



図3 SK01から出土した土器杯

かに内傾する素文の周縁を有し、中房の突出は顕著ではない。中房の蓮子は $1+4+8$ と整然と配置され、それぞれに周環を伴う。 $2 \cdot 3$ は同范の可能性がある。 $4 \cdot 5$ は間弁と周縁の間に擬痕が認められる。周縁部が剥離した個体（3）がある。M5類は7の周縁外面にはわずかに范端が残る。

軒平瓦（図版2） 全て重強文軒平瓦である。三重強（9~18）が最も多く、19は四重弧、20は五重弧の可能性がある。額の型式は直線額（12・13・15~17）と段額（14）がみられる。11の額部には格子タタキ（H2類）の一部が残っていた。

丸瓦（図版2） 小破片が多く全体の形状が判るものは無かった。21は行基式、22は玉縁式である。

平瓦（図版3~5） 小破片が多く全体の形状が判るものは無かった。凸面の整形によりナデ、繩目タタキ、繩目タタキを除くタタキ具を使用するもの、摩耗等により詳細不明のものに大別した後、繩目を除くタタキをH1~19類に分類した（表1~3）。この結果、繩目タタキと繩目を除くタタキの割合はほぼ同数であった。また、繩目を除くタタキの中ではH1類が22.3%と最も多く、次にH4類が20.3%、H11類が17.3%と続き、この3型式で全体の全体の59.9%を占めていた（注7）。

博（図版5） 全体の形状は不明である。上面・側面・下面に丁寧なナデを施す。

面戸瓦（図版5） 全体の形状は不明である。上面に布目が認められる。

鶴尾（図版5・8） 詳しい部位は不明だが、46は胴部と鰐部の接合部、47・48・52は胴部とみられる。46・47・52は沈線文鶴尾である（注8）。48は低凸帯の唐草文を有し蓮華文鶴尾の可能性がある（注9）。

近世瓦（図版5） 49は左巻巴文の軒丸瓦である。50は水波文の軒平瓦である。

第4章 総括

瓦集積の主体は古代瓦であるが、その出土状況及び混入遺物をみると、近代以降に別の場所から運ばれてきた可能性を考えられる。複弁八葉蓮華文軒丸瓦M2類の瓦当文様を近隣の辻井廃寺のI類（注10）と比較すると、同文であるが、花弁の形状が前者は後者より丸味が強く短い傾向があり、異范とみられる（図4）。ただし、今回の調査では出土しなかったが、M1類は辻井廃寺のI類と酷似する。これらの時期は7世紀末から8世紀初頭頃の範疇で捉えられ、辻井廃寺に最初に瓦が葺かれた時期と同時期と考えられる。軒瓦以外では、平瓦H11類は市之郷廃寺のH24類（注11）と同型式である。H6類は離れ砂の使用から8世紀中葉以降、H19類は書写構江遺跡（注12）の平瓦B類と同型式であり、奈良時代中頃から平安時代中頃とみられる。H16類は平安時代中期から後期に下る可能性がある。

このように、集積した古代瓦は白鳳期だけでなく、奈良・平安時代に下るもののが一部含まれていると考えられる。瓦の元の所在地、運ばれてきた経緯等については今後の課題としたい。

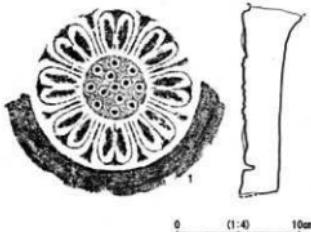


図4 辻井廃寺出土の複弁八葉蓮華文軒丸瓦 I類（H24）

（注1） 兵庫県教育委員会 2009 「今宿遺跡Ⅰ」 兵庫県文化財調査報告第335号

（注2） 兵庫県文化・考古博物館 2010 「辻井廃寺」『姫路市史 第七巻』資料編「古き」原路市

（注3） 兵庫県教育委員会 1972 「特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表 第1分冊」

（注4） 前掲注1に同じ。

（注5） 兵庫県教育委員会 2009 「今宿遺跡Ⅱ・山谷遺跡」 兵庫県文化財調査報告第332号、兵庫県教育委員会 2011 「今宿遺跡Ⅲ」 兵庫県文化財調査報告第395号

（注6） 分類は非専門に準じた。調査担当者であった公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターの猪宮正氏には本資料を実見して頂き、感謝いたします。

（注7） 第1次発香の結果を同様に集計すると、K1類・K4類の合計で21.6%、K1類・K2類・K5類・K7類・K9類の合計で19.7%、K13類で10.1%の順となる。これらで全体の53.5%を占めることは、今宿の調査結果と比べて大きな差異は認められない。

（注8） 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターの猪宮正氏には本資料を実見して頂きご教示を得た。

（注9） 辻井廃寺から鉛凸帶の唐草文を有する瓦が出土しており、蓮華文鉛凸帶とみられている（前掲2）。

（注10） 前掲2に同じ。

（注11） 兵庫県教育委員会 2013 「市之郷遺跡Ⅴ」 兵庫県文化財調査報告第45号

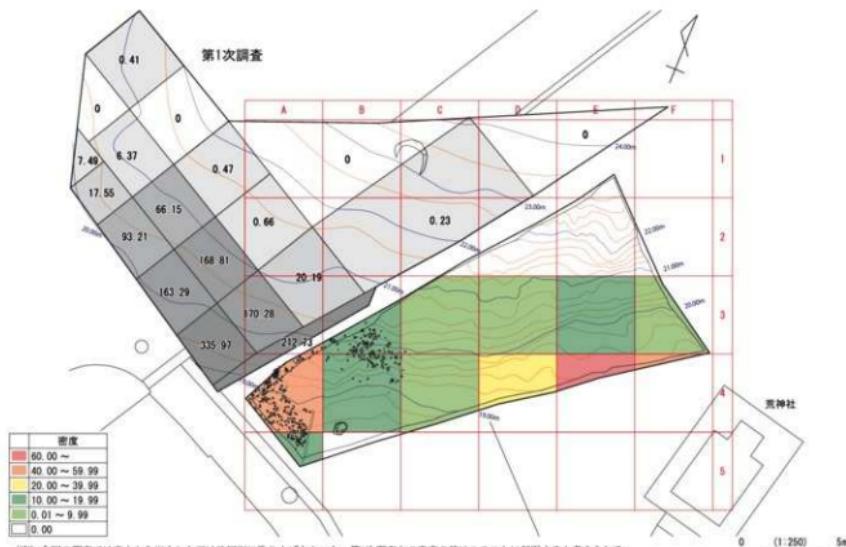
（注12） 鹿児島市教育委員会 2019 「書写構遺跡（坂本城跡第21次発掘調査告白）」 鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告第29集

地区名	面積 (m ²)	丸瓦 (kg)	平瓦 (kg)				その他 (kg)	計 (kg)	密度 (kg/m ²)	備考
			ナデ	網目	タタキ	詳細不明				
A-3	0.3	5.1	3.7	0.6	1.8	3.6	0.2	15.0	50.00	近世瓦含む
A-4	13.3	142.4	204.2	40.6	103.3	132.2	1.7	624.4	46.94	
A-5	4.3	17.4	18.7	8.5	10.7	20.1	0.2	75.6	17.58	
B-3	6.9	23.9	10.4	14.7	18.8	19.2	0.2	87.2	12.63	
B-4	16.0	69.2	42.2	57.1	54.2	80.7	1.9	305.3	19.08	近世瓦・焼瓦含む
B-5	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.00	
C-2	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.00	
C-3	14.9	0.9	0.4	0.0	0.8	0.5	0.0	2.6	0.17	
C-4	14.1	22.5	10.9	17.1	21.5	17.7	0.1	89.8	6.36	
D-2	8.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.00	
D-3	16.0	11.9	11.1	9.3	6.0	12.1	0.2	50.6	3.16	
D-4	9.6	57.9	63.8	53.8	29.8	57.3	1.7	264.3	27.53	鰐尾含む
E-1	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.00	
E-2	15.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.00	
E-3	16.0	55.0	38.9	40.5	22.8	36.8	0.0	194.0	12.12	
E-4	5.4	65.7	86.0	56.4	40.5	75.9	1.6	326.1	60.38	鰐尾含む
F-2	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.00	
F-3	11.3	14.7	18.8	9.8	12.0	14.2	0.2	69.7	6.16	近世瓦・焼瓦含む
F-4	1.6	9.1	32.3	7.7	15.7	7.9	2.1	74.8	46.75	塙含む
表土	—	7.5	8.0	1.2	—	2.3	—	19.0	—	
法面	—	42.1	59.2	7.0	—	23.9	—	132.2	—	
計	161.4	545.3	608.6	324.3	337.9	504.4	10.1	2,330.6		
		丸瓦			平瓦	その他	計			
		545.3		1,775.2		10.1	2,330.6			

(注1) 平瓦の分類は、内側の差引方法による。「タタキ」はタタキ具の痕跡を有しているものを主な対象とし、表面にこうした痕跡を認別できないものを全て集計しているが、小破片で判別せざるをえなかつたため、本来的にはタタキ具の痕跡を有するものと含む可能性は否定できない。「純目」は純目タタキ、「タタキ」は純目を除くタタキ具を使用するものとする。

(注2) 法面は主に調査区西壁から採取したものである。

表1 瓦の地区別集計



(注3) 今回の調査では表土から出土した瓦は地区別に取り上げなかった。第1次調査との密度の差はこのことに起因すると考えられる。

図5 今宿遺跡 瓦地区別出土量

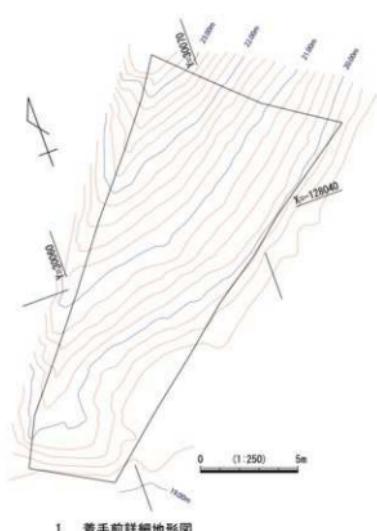
分類	特 徴	遺物番号
H1類	縦斜格子1.0cm×0.7cm程度（計測値は長軸×短軸。以下同じ）。第1次調査のK1類・K2類・K3類・K7類・K9類に相当。	25
H2類	横斜格子1.0cm×0.7cm程度。ばらつきが目立つ。第1次調査のK4類・K5類・K6類・K8類・K11類・K26類に相当。	11・26
H3類	横菱形1.5cm×1.0cm程度。凹面の布目が側面に巻き込む個体（27）がある。一枚づくり。	27
H4類	横菱形・平行四辺形2.0~3.0cm×1.0~1.5cm程度。凹面の布目が端面まで巻き込む個体（28）がある。一枚づくり。第1次調査のK12類・K14類に相当。	28
H5類	横菱形3.0cm×1.5~2.0cm程度。第1次調査のK16類と同タイプ。	30
H6類	縦菱形1.2~1.5cm×1.0cm程度。凹面の布目が側面から凸面側縁まで及ぶ個体（29）がある。凸面に離れ砂が顕著に認められる個体（29）がある。一枚づくり。	29
H7類	縦斜格子・平行四辺形2.3~2.7cm×2.0~2.3cm程度。	36
H8類	縦菱形3.0cm×2.0cm程度。	
H9類	縦菱形3.0cm×2.5cm程度。第1次調査のK17類と同タイプ。	
H10類	縦菱形4.0cm×2.5cm程度。	
H11類	正格子1.5cm×1.5cm程度。格子内に「+」文。ただし、全ての格子内に「+」文は付加されない。第1次調査のK1類。『市之郷遺跡V』（兵庫県教育委員会2013）のH24類と同タイプ。	31
H12類	横斜格子4.0cm×2.5cm程度。格子内に「-」文。第1次調査のK21類と同タイプ。	32
H13類	横斜格子5.0cm×2.5cm程度。格子内に「-」文。一部の格子に外形線から対角線の中点付近に向けて楔状の模様が付加される。第1次調査のK18類・K19類・K20類に相当。	33・34
H14類	縦斜格子2.0~2.5cm×1.5cm~2.0cm程度。格子内に「」文または短辺に平行する「-」文。格子内に文様が付加されるのは一部である。第1次調査のK15類と同タイプ。	35
H15類	須恵器製作技法と同様の平手タキ。通文文（37）を含む。	37
H16類	平行タキ。凹面の布目が凸面側縁まで巻き込む個体（38）がある。一枚づくり。第1次調査のL1類・L2類と同タイプ。	38
H17類	平行条線。第1次調査のJ1類・J3類に相当。稀に細い条線がある。第1次調査のJ2類と同タイプ。	39・40
H18類	綫長の平行四辺形・台形1.5cm×2.0~4.5cm程度。形状の崩れが目立つ。木目が顕著に残る。第1次調査のK10類・K24類・K25類に相当。	42
H19類	タタキ原体（幅4.0cm以上）に3~4本単位の平行線が斜行する部分と1~2本の斜線が交差する部分が併存し、その連続により大小の斜格子・「×」状の模様を呈す。第1次調査のK23類、「香塩構江遺跡（阪本城跡第21次発掘調査）」（姫路市教育委員会2019）の平瓦B類と同タイプ。	41

表2 平瓦の純目を除くタタキの分類一覧

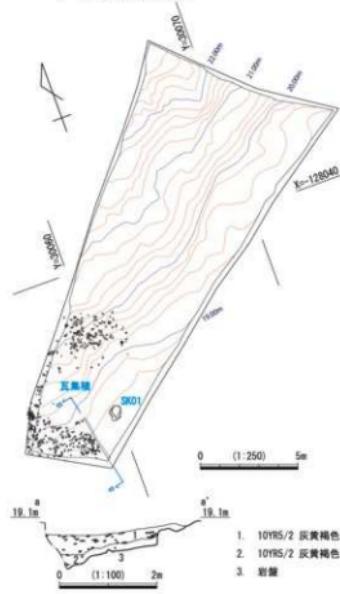
	(単位:kg)													
	A-3	A-4	A-5	B-3	B-4	C-3	C-4	D-3	D-4	E-3	E-4	F-3	F-4	計
H1類	0.1	38.8	1.8	1.4	5.6	0.3	0.5	0.6	6.2	3.5	8.5	2.7	5.2	76.2
H2類	0.4	5.7	1.2	0.0	2.1	0.0	0.4	0.5	2.4	0.0	4.1	0.9	1.4	19.1
H3類	0.0	1.9	0.2	3.8	4.2	0.2	2.4	0.0	1.3	0.8	0.6	0.0	0.0	15.4
H4類	1.1	10.5	3.8	2.6	15.5	0.0	4.5	2.1	9.3	6.5	8.2	3.1	1.6	68.8
H5類	0.0	2.6	0.3	0.4	1.4	0.0	0.7	0.0	0.5	0.0	0.9	0.1	0.0	6.9
H6類	0.0	0.3	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.7	0.1	0.5	0.0	0.0	2.2
H7類	0.0	3.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	0.8	0.0	0.2	5.0
H8類	0.0	0.2	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
H9類	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4
H10類	0.0	0.2	0.2	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
H11類	0.1	12.6	1.0	4.0	11.0	0.3	7.0	0.1	3.0	4.4	7.9	3.0	4.0	58.4
H12類	0.0	1.4	0.1	0.1	1.2	0.0	0.9	0.8	2.3	4.8	3.0	0.3	1.1	16.0
H13類	0.1	3.4	0.1	2.5	5.4	0.0	2.7	0.1	0.2	0.3	0.6	0.5	0.6	16.5
H14類	0.0	4.0	0.9	2.5	4.5	0.0	1.4	0.1	0.5	0.3	0.9	0.1	0.3	15.5
H15類	0.0	5.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.4	0.0	6.8
H16類	0.0	0.7	0.0	0.6	0.7	0.0	0.1	0.2	1.1	0.2	0.1	0.0	0.0	3.7
H17類	0.0	10.6	0.8	0.5	1.6	0.0	0.9	1.5	1.5	1.5	2.9	0.9	0.8	23.5
H18類	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	0.5	0.0	0.1	2.7
H19類	0.0	0.5	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6
計	1.8	103.3	10.7	18.8	54.2	0.8	21.5	6.0	29.8	22.8	40.5	12.0	15.7	337.9

表3 平瓦の純目を除くタタキの地区別集計

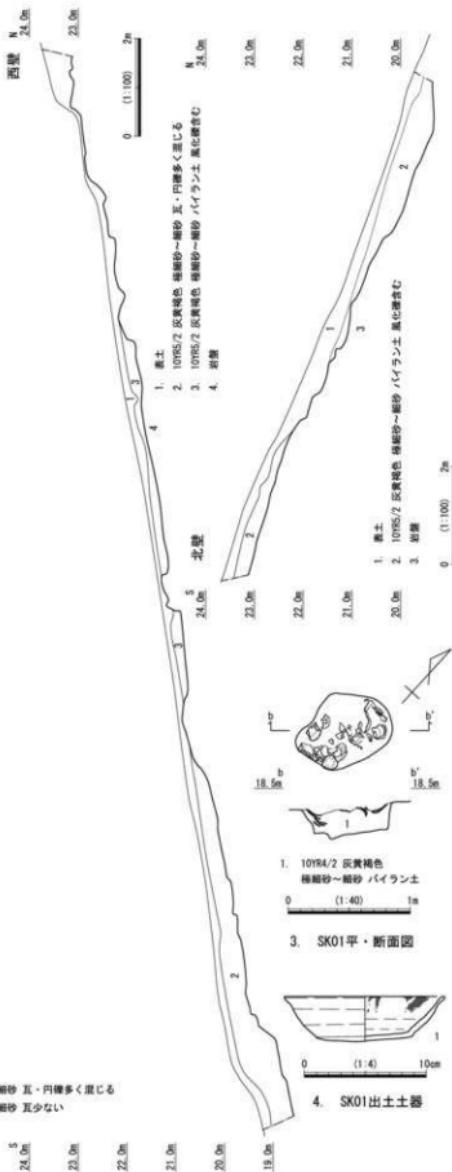
圖版 1



1. 着手前詳細地形図



2. 調査区平・断面図



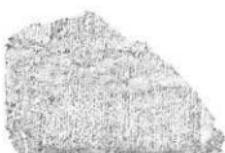
着手前詳細地形図、調査区平・断面図、SK01平・断面図、SK01出土土器



各断面は主要なものののみ図化した。
 0 (1-4) 10mm

出土瓦 (1)、軒丸瓦 (2~8)、軒平瓦 (9~20)、丸瓦 (21・22)

図版3



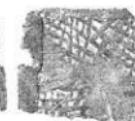
23



24



25



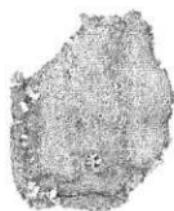
26



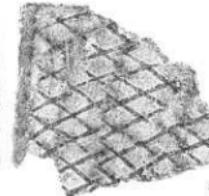
27



28



29

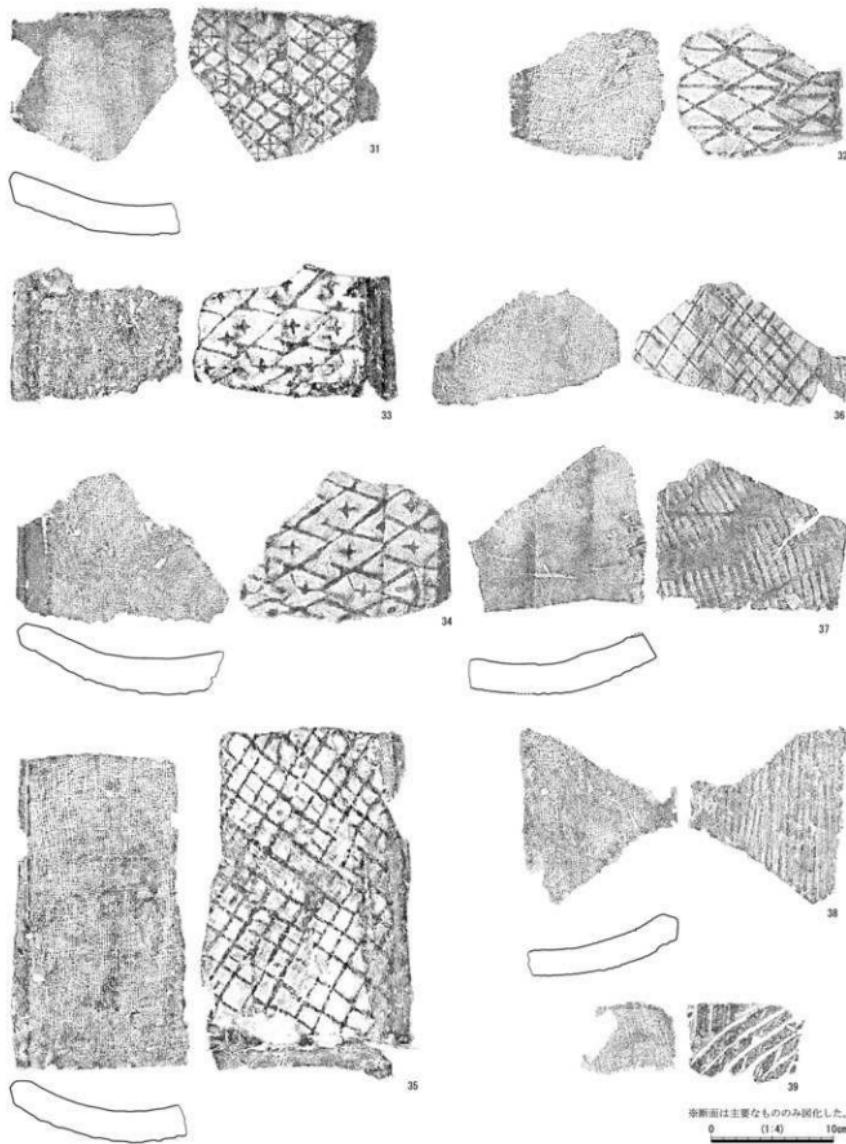


30



余断面は主要なものののみ図化した。
0 (1:4) 10cm

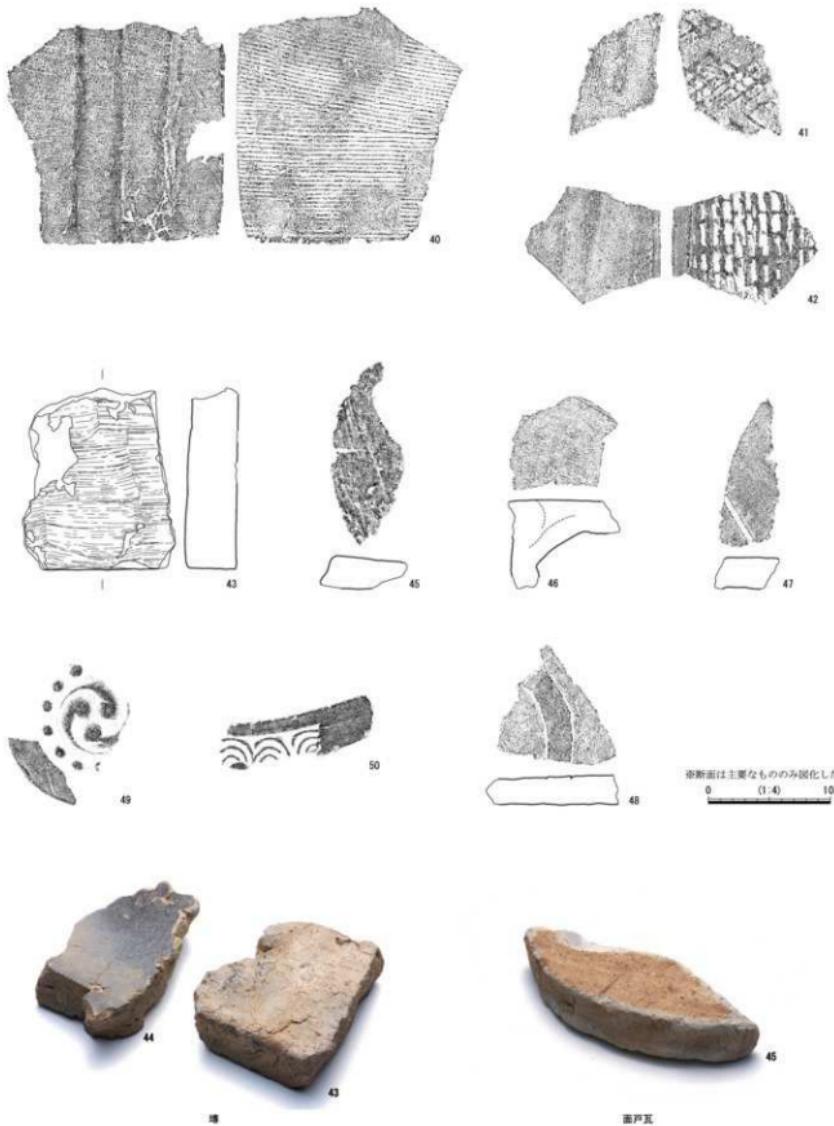
出土瓦 (2) 平瓦 (23~30)



出土瓦 (3) 平瓦 (31~39)

分断面は主要なものののみ図化した。
 0 (1:4) 10cm

図版5



出土瓦 (4) 平瓦 (40~42)、埴 (43・44)、面戸瓦 (45)、鰐尾 (46~48)、近世瓦 (49・50)



着手前状況（南東から）



調査区全景（南東から）



調査区南部瓦集積状況（東から）

遺構写真（1）



調査区西壁（東から）



瓦集積断面 a-a'（北東から）



SK01 土師器杯出土状況（西から）



SK01 完壠状況（西から）

遺構写真（2）



軒丸瓦 M2 類

軒丸瓦 M5 類



軒丸瓦 (5) の瓦当面の鉛痕

軒丸瓦 (4) の瓦当部と丸瓦との接合部分

軒丸瓦 (2) の瓦当断面



鰐尾
出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	いまじゅくいせき							
書名	今宿遺跡							
副書名	第4次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	南憲和							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市西郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和2年(2020年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
今宿遺跡	兵庫県姫路市 西今宿五丁目 944番地	28201	020161	34° 50' 43"	134° 39' 43"	2019.4.18 ~ 2019.5.8	161m ²	開発工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号	
今宿遺跡	散布地	飛鳥～平安時代	土坑・瓦集積		軒丸瓦・軒平瓦・鶴尾・埴・土師器杯		20190024	
要約	多量の古代瓦(約2,300kg)が二次的に集積した状況で出土した。この中で、いわゆる川原寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦(7世紀末から8世紀初頭頃)は近隣の辻井庭寺から出土したの瓦と同文であった。近世瓦・煉瓦等が混入していることを勘案すると、これらの瓦は近代以降に別の場所から運ばれてきた可能性がある。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第98集	
今宿遺跡	
－第4次発掘調査報告書－	
令和2年(2020年)3月31日発行	
編集	姫路市埋蔵文化財センター 〒671-0246 兵庫県姫路市西郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950
発行	姫路市教育委員会 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本	内海印刷株式会社 〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目8番4号

